

# 阿騎野と宇智野

## —『万葉集』のコスモロジー—

梶川 信行

### 1 序

平城京は南を正面とした条坊制の都であり、その北辺に平城宮が置かれている。周知のように、それは中国の都城を範としたものであり、南面する天子の存在を前提とした都市計画にはかならない。ところが、日本には古来、東西をタテと呼び、太陽の運行方位を優位とする宇宙観が存在したのだとする指摘がある。すなわち、7世紀の後半に、中国から新しい宇宙観と思想が導入されたことによって、南北をタテとし、それを優位軸とする宇宙観に変わったのだ、と言うのである<sup>(1)</sup>。

確かに、近年確認されつつある鳥庄遺跡と飛鳥京跡の遺構<sup>(2)</sup>を比較してみても、その時期にそうした大転換があったということを窺い知ることができる。しかし、前期難波宮の遺構を見ても明らかのように、南北を軸とする建造物の存在は7世紀の前半に溯り得る。それは、たとえば西暦と元号を併用するようなものであって、西暦の採用によって元号を捨て去るといった二者択一の問題ではあるまい。平城京の時代においてもなお、東西を優位軸とする宇宙観は、依然として存在し続け、南北を軸とする宇宙観と共存していたのだと考えた方がよい。

### 2 西向きの王権

確かに、8世紀には東を優位とする意識があったと考えられる。『日本書紀』（神功皇后摂政前紀冬十月の条）には、「東に神の国有り。日本と謂ふ。亦聖の王有り。天皇と謂ふ」と見える。東アジアに対して、西向きに対峙する王権である。

たとえば、住吉の神の配置と社殿の向きである。周知のように、住吉大社（大阪市住吉区住吉）には航海神である住吉三神と外征の神としての神功皇后が祀られているが、『住吉大社神代記』『延喜式』などによれば、住吉の神は播磨・長門・筑前・壱岐・対馬など、難波津を起点とする国際航路の重要な各拠点に配置されている。もちろん、奈良時代の社殿は存在しないが、それらは概ね西向きである。『日本書紀』にはしばしば「西蕃」という語が見られるが、それに象徴されるように、西は服属させるべき国——『令集解』（公式令）に引く古記には「隣国者大唐、蕃国者新羅也」とされている——のある方向だと考えられていたからであろう。これは、東アジアにおける日本列島の位置と、その形がもたらした必然的な結果でもあろうが、そこには東西をタテとし、東を優位とする宇宙観が反映していたのだと見ることができる。

また、聖武天皇は神亀元年（724）十月に紀伊国へ、同二年十月には難波宮へ、そして三年十月には播磨国印南野へと行幸している。『万葉集』の巻六には、その時笠金村・車持千年・山部赤人によって詠まれた従駕歌群（巻六・917～941）が存在するが、これらの行幸とその時の歌々からも、同様の世界観の存在を窺い知ることができる。各行幸の意義とその従駕歌についてはすでに論じたことがあるのだが、それらはいずれも、聖武朝の日本の覇権主義的な外交政策に基づく行幸であったと考えられる<sup>(3)</sup>。

『続日本紀』によれば、神亀元年の紀伊行幸は、和歌浦湾に面した海部郡玉津嶋頓宮が目的地であったが、それは現在の和歌浦小学校（和歌山市和歌浦西）のあたりに設置された可能性が高い<sup>(4)</sup>。その付近には、古くから「紀伊水門」（『日本書紀』神功皇后摂政元年二月の条）と呼ばれる港が存在し

たが、それはかつて和歌浦湾に注いでいた紀ノ川の河口付近にあったと考えられている<sup>(5)</sup>。

また、印南野への行幸では、聖武天皇は明石郡邑美頓宮に滞在したが、それは播磨灘に面した「魚住泊」の背後に広がる高台に置かれたと推定されている<sup>(6)</sup>。「魚住泊」とは、三善清行「意見十二箇条」(『本朝文粹』巻二)の「重請修復播磨国魚住泊事」にその存在が伝えられているが、それは明石市大久保町の江井ヶ島港に比定されている<sup>(7)</sup>。播磨灘に面した漁港の一つであって、『万葉集』では「名寸隅の船瀬」(巻六・935)と呼ばれている。『住吉大社神代記』によれば、そのあたりは住吉大社の神領だったが、現在でもその一帯には住吉神社が多い。

同じく『神代記』には、「明石郡名次浜」が住吉大社の神領になった由来を語る伝承が見られる。紀伊国の藤代から流した藤の枝が流れ着いたところが明石の「藤江」——『万葉集』では「藤井の浦」(巻六・938)、「藤江の浦」(巻六・939)とされる——であり、そこに住吉大神が鎮座したのだという伝承である。いつ植えられたのかは不明だが、明石市魚住町中尾の住吉神社の境内には、現在もその伝承に基づくフジの古木が存在し、立派な藤棚が設けられている。

こうして見ると、都の西側の玄関口に相当する難波宮・難波津を中心として、玉津嶋頓宮と邑美頓宮は一对の関係にあったと見做すことができる。玉津嶋は紀淡海峡を、邑美頓宮は明石海峡を、外側から守護する位置にあっている。すなわち、難波を中心とした三つの拠点への行幸は、大和の王権の西側の玄関口を固めるために、そこに鎮座する神々に対する祭祀を行なうことを最大の目的としたものであったと考えることができる。西側の蕃国に対して「背に日神の威を負ひ」(『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年四月の条)て立つ王権を、そうした形で支えていたのである。

『日本書紀』の崇神天皇九年に、

春三月の甲子の朔戊寅に、天皇の夢に神人有して、誨へて曰はく、「赤盾八枚・赤矛八竿を以て、墨坂神を祠れ。亦黒盾八枚・黒矛八竿を以て、大坂神を祠れ」とのたまふ。

四月の甲午の朔己酉に、夢の教の依に、墨坂神・大坂神を祭りたまふ。

とする記事が見られる。「墨坂神」は現在の墨坂神社(宇陀市榛原区萩原)に相当すると見てよいが、「大坂神」については、比定される社が二つある。香芝市穴虫東と、同市逢坂に鎮座する大坂山口神社である<sup>(8)</sup>。しかし、いずれを是とするにせよ、「墨坂神」と「大坂神」は東西に延びる横大路の延長線上に位置している。「墨坂神」は大和と伊賀との境であり、「大坂神」は大和と河内との境にあたる。東西の坂(境)に鎮座する一对の神であったと考えられる。南が朱雀、北が玄武という四神の色と、方位が90度ずれているが、ここにも東西を優位軸とする宇宙観の存在を確認することができる<sup>(9)</sup>。東が赤、西が黒というのは、東が日の昇る方向であり、西が日の沈む方向、すなわち夜に通ずるとする観念が存在したことを窺わせる<sup>(10)</sup>。

『延喜式』や『倭名類聚抄』などに見られる国郡の図式も、畿内、東海道、東山道、北陸道と続き、西海道は最後に置かれている。東歌の配列が『延喜式』の国郡図式と一致している<sup>(11)</sup> ことから窺えるように、こうした図式はすでに平城京の時代には定着していたものと考えてよい。このように、日本の古代において、東西を優位軸とし、とりわけ東を優位とする事例は枚挙に暇がない<sup>(12)</sup>。

そもそも、平城京の時代の人々の地理的認識は、現代の我々のように、宇宙から日本列島の形を認識するようなものだったわけではあるまい。たとえば、越前国足羽郡(現福井市)に拓かれた東大寺の莊園の図「東大寺開田地図」(正倉院中倉蔵)を見てみると、そのあたりの事情がよく理解できる。碁盤の目状の田んぼの周囲には、東西南北それぞれの方向に、平地に立つ人間の目に映った山々の形が描かれている。山頂には、山の高さとは不釣合いに、大きく枝を広げた木々の姿も見える。上に「北」と書かれているが、それは決して、今日の地図の常識と同じなのではなく、地図を広げた時に、

前方を上にしたことに基づくのであろう。カーナビが常に前方が上になるのと同じである。平城京から越前は、ほぼ北にあたる。だからこそ、「東大寺開田地図」は北が上にされているのであろう。こうした点からも明らかなように、古代の人々の地理的認識は、水平的な視線に基づく身体感覚的なものであったと考えられる。遠近は、二つの地点の距離として数量的・概念的に認識されるものではなく、峠をいくつ越え、川を何回渡る、といった経験的なものだったのであろう。その点ではむしろ、奥行きのような感覚で認識されたものであったと考えた方がよかろう。

陽が昇る方角と沈む方角という東西の軸が具体的・現実的であるのに比して、北極星を基点とする南北の軸は、夜にならないと確認ができないだけに、やや抽象的である。あるいは、理念的である、と言った方がいいのかも知れない。律令官人たちも日の出とともに出勤したが、周知のように、日の出と日没は、近世に至るまで、生活時間の基準であった。東西が優位軸として機能するのは、そうした点も理由の一つであったと考えられる。

してみると、平城京の時代においても、北極星を背にして立つ「天皇」でありつつ、その一方では依然として、「背に日神の威を負ひ」て立つ「大王」という姿を強固に残していた、と見ることができ。そして、東を優位とするのは、言うまでもなく「大王」が「日の皇子」だったからであろう。と同時に、東北地方を除いた日本列島が、大和国を中心に東西に広がっており、海外への主たる交通路が、難波から西に向かって続いていることに基づく必然的な結果でもあったと考えられる。

今、日本列島が東西に広がっていると言ったが、それは現代の地図を見た印象を前提とした発言ではない。江戸時代の模写しかないとされるが、延暦二十四年（805）の『輿地図』（下鴨神社蔵）に描かれた本州は、弓のように彎曲した形ではなく、東西方向に広がっていると言う<sup>(13)</sup>。また、これも天正十七年（1589）書写の図が最古のものだとされているが、8世紀に溯る可能性があると言う『行基菩薩説大日本国図』<sup>(14)</sup>も、実際よりも彎曲が少なく、しかも東が上になっている。このように、大和を中心とした日本は東西に広がっており、東が優位であるという認識は、すでに平城京の時代には存在した可能性が高い。

### 3 「天皇」と「大王」

『万葉集』は、漢文体の題詞では「天皇」と表記しているが、歌の表現においては、古来の呼称であるオホキミで一貫している。「於保伎美」「於保吉美」などとする一字一音の19例のほか、訓字主体表記の60例も、「大王」（25例）「大皇」（6例）「太皇」（2例）「大君」（1例）など、オホキミと訓むしかない例が多数を占める。もちろん、異訓は見られないが、「王」（14例）や「天皇」（7例）についても、やはりオホキミと訓むべきであろう。つまり、制度的には「天皇」となっているとしても、ヤマトウタという固有の文学形式の中においては、依然として、オホキミという呼称で称えられるべき存在だった、ということである。「天皇」という称号が道教の神学用語に基づくという見方はすでに定説化している<sup>(15)</sup>が、言うなれば、当時の世界標準に従って南面した「天皇」も、ヤマトウタの中では依然として、「背に日神の威を負ひ」て立つ古来の「大王」だったということになる。

『万葉集』の形成過程においても、東西の方位が強く意識されていた、ということを知ることができる。たとえば、巻一の藤原京の時代以前の歌々、すなわち「原万葉」<sup>(16)</sup>と見られる部分に収録された歌々は、巻頭的な意義を持つ雄略天皇御製（巻一・1）を除くと、香具山で国見をする舒明天皇御製（巻一・2）から始まっている。香具山は盆地の東側に位置するので、舒明はおそらく、太陽の昇る方向を背にして、西向きに国見をしたということであろう。続いて、飛鳥の西側にあたる宇智野

に狩に行く時の歌（巻一・3～4）が置かれ、最後は東の阿騎野における狩の歌（巻一・45～49）で終わっている。しかも、巻一にはなぜか伊勢と紀伊に関わる歌が多い。「原万葉」と言われる部分に限って見ると、伊勢に関わる歌が9首、紀伊に関わる歌が6首と、全体の3割ほどを占める。

また、伊勢と紀伊以外で、大和国の外の地名が詠み込まれた歌には、一時的に都となった近江を除くと、讃岐国安益郡（巻一・5～6）、熟田津（巻一・8）、印南国原（巻一・14）と、瀬戸内航路周辺の歌が目立つ。すなわち、外の世界を見る目は主に西を向いていたと見ることができる。もちろん、その点も東が優位であったことの反映であろう。御代ごとに選ばれた歌々は、編者の歴史認識を反映している<sup>(17)</sup>はずだが、それと同様に、こうした地名の分布は、持統朝あたりに形成されたと見られる「原万葉」の地理的認識を反映していた可能性が高い。

『万葉集』に「東歌」があつて、「西歌」が存在しないことも、東の優位性を反映しているのではないか。東国の人々は王権に馴化し、ヤマトウタをなすことも可能だったが、西は「蕃」とされ、文化を異にしていると見做されたのであろう<sup>(18)</sup>。周知のように、8世紀においても、防人は東国から徴集されているが、こうした眼差しは「天皇」のものではなく、「大王」のものだと見た方がよい。御代別の標や題詞で「天皇」の時代としての位置づけを行ないつつも、ヤマトウタのアンソロジーである『万葉集』はやはり、伝統的な「大王」の視野を基本としたものであったと言ってよいだろう。

#### 4 阿騎野と宇智野

ところで、ともに狩の歌が詠まれている宇智野と阿騎野は、王権の地であった奈良盆地の南部から見て、一対の関係にある土地であったと見做すことができる。どちらにおいても「馬並めて」の狩が行なわれたが、宇智野は紀伊へ、阿騎野は伊勢へと続く交通の要衝であった。伊勢には皇太神宮が存在するのに対して、紀伊には日前神宮（和歌山市秋月）が鎮座している。『延喜式』神名帳に「日前神社名神大。月次相嘗新嘗」と見える神社である。その祭神は日前大神。天照大神の前霊であるとされる<sup>(19)</sup>。すなわち、皇太神宮と日前神宮はいずれも、天照大神を祀っているばかりでなく、神階の贈られない特別な神社であるという点も共通している。また『古語拾遺』によれば、三種の神器の一つである鏡を作った時、最初に作った不具合の鏡が日前神宮のご神体であり、改めて造り直した完全な鏡が皇太神宮のご神体である<sup>(20)</sup>、ともされている。すなわち、ここでも東が優位なのである。

舒明朝のものとして位置づけられている宇智野の歌には、

たまきはる 宇智の大野に 馬並めて 朝踏ますらむ 草深野 (巻一・4)

と、現在推量の形で「草深野」という季節感が詠まれている。夏の狩なのであろう。だとすれば、それは推古朝の頃から行なわれるようになった五月五日の葉狩の時の歌であった可能性が高い。すなわち、夏至の頃であったということになる。

それに対して、軽皇子は「み雪降る 阿騎の大野」（巻一・45）に赴いている。この時の「短歌」の一つ、

東の 野にかぎろひの 立つ見えて 返り見すれば 月傾きぬ (巻一・48)

という景観を手掛かりに、それは持統六年（692）十一月十七日のことであったとする説がある<sup>(21)</sup>。それに従えば、太陽暦の十二月三十一日<sup>(22)</sup>。周知のように、当面の短歌には異訓もある<sup>(23)</sup>ので、厳密には不明と言うしかないが、概ね冬至の頃であろう。だとすれば、夏至の頃に太陽の沈む方向である西の宇智野に行き、もっとも日の短い冬至の頃に、昇り来る太陽を求めて東の阿騎野に行った、ということになる。

紀伊国の日前神宮の境内には、それと一対の神社として国懸神宮が鎮座している。これも式内社だ

が、東側に社のある国懸神宮が日の出を、西側の日前神宮が日没を象徴しているとされる。また、阿騎野に鎮座する阿紀神社（宇陀市大宇陀区迫間）には、天照大神とともに、天手力男命が祀られている<sup>(24)</sup>。いつから祀られているのかは不明だが、太陽を取り戻そうとした時に直接的な力を発揮した神である。そうした点でも、伊勢・阿騎野と紀伊・宇智野は一对の関係にあったと見做すことができる。

## 5 阿騎野と阿紀神社

阿紀神社と宇智野に鎮座する宇智神社（五條市今井）も、一对の存在と見做すことができる。もちろん、いずれも式内社である。

周知のように、やや時代の下がる文献だが、『皇太神宮儀式帳』には「宇太の阿貴宮」の存在が伝えられている。垂仁天皇の御代、天照大神が倭姫命を御杖代として、「美和の御諸宮」より「宇太の阿貴宮」に座し、諸宮を経て、やがて五十鈴川の川上に鎮座したとされるが、阿紀神社は倭姫命が「阿貴宮」にとどまったことを契機として創始されたと伝えられている。また『太神宮諸雜事記』（垂仁天皇廿五年・養老六年）にも、宇陀が神宮の神戸であったとする伝えがあり、阿紀神社は「神戸大神宮」とも呼ばれていた。現在も神明鳥居に神明造りの社殿であって、本殿は西向きに建てられている。つまり、伊勢を遥拝する形だが、そこは大和における伊勢祭祀の拠点であったと考えられる<sup>(25)</sup>。

人麻呂の阿騎野の長歌には、

やすみしし 吾ご大王 高照らす 日の皇子（中略）太敷かす 都を置きて こもりくの 泊瀬  
の山は 真木立つ 荒き山道を 石が根 禁樹押し靡べ 坂鳥の 朝越えまして（中略）み雪降  
る 阿騎の大野に …… （巻一・45）

と、軽皇子は方向違いの「泊瀬の山」を越えて「阿騎の大野」に行ったことがうたわれている。その理由などについては諸説があるが、『日本書紀』に見られる「泊瀬」の用例はいずれも泊瀬川の右岸である。したがって、「泊瀬の山」もその一帯だと考えなければならない。してみると、一行は現在の桜井から、後に伊勢本街道と呼ばれる道を東に進み、西峠を越えて、大和と伊勢の境界である墨坂まで行った、ということになろう。これは皇嗣と目された軽皇子が、神武東征の故事や壬申の乱における天武天皇の事跡に習い、東側の菟田野から阿騎野に入ったということを伝えているのであろう。これも、「背に日神の威を負ひ」て立つ「大王」という観念と、東を優位とする宇宙観の存在を伝える事例の一つだと考えることができる。

しかし、菟田野に赴いた理由は、それだけではあるまい。『日本書紀』の皇極天皇三年（644）三月の条に、次のような記事がある。

倭国言さく、「頃者、菟田郡の人押坂直、（中略）一の童子を將て、雪の上に欣遊しふ。菟田山に登りて、便ち紫の菌の雪より挺て生ふるを看る。高さ四寸余。四町許に満めり。乃ち童子をして採取りて、還りて隣の家に示す。総言はく、「知らず」といふ。且毒しき物なりと疑ふ。是に、押坂直と童子と、煮て食ふ。大だ気しき味有り。明日往きて見るに、都て不在し。押坂直と童子と、菌の羹を喫へるに由りて、病無くして寿し」とまうす。或人の云はく、「蓋し、俗、芝草といふことを知らずして、妄に菌と言へるか」といふ。

宇陀市にはかつて、多くの鉾山が存在した。現在では廃鉾になってしまったところもあるが、菟田野区大沢の大和水銀鉾山、大宇陀区本郷の神戸鉾山、同区藤井の奈良水銀鉾山などである。いずれも辰砂（硫化水銀によって赤く発色した鉾物）を産出している。周知のように、『抱朴子』（内篇）などによれば、水銀は不老長生を可能にする仙薬だと考えられていた。「菟田郡」に「芝草」が群生して

いて、それを取って食べた人たちが長寿を得たとする右の伝承は、水銀鉱床の存在と関係があろう

(26)。

宇陀市には、その存在を示す「丹生」という地名も分布するが、ニフとは、赤土（ニ）が広がっている所（フ）の意にほかならない<sup>(27)</sup>。「宇陀の血原」（『日本書紀』神武天皇即位前戊午年八月の条）——現在の宇陀市菟田野区宇賀志に鎮座する宇賀神社の一带であろう<sup>(28)</sup>——という地名も、水銀を含む赤い土が露出している所が多かったことに基づくのではないか。夭折した父日並皇子の轍を踏まないためにも、軽皇子はそうした宇陀に赴かなければならなかったのであろう。

## 6 宇智野と紀伊国

一方、宇智神社と日前神宮にも深い繋がりのあることを窺うことができる。宇智神社の祭神については諸説があるが、一般に内臣の祖で孝元天皇の皇子の彦太忍信命（ひこまつおしの<sup>まことのみこと</sup>）であるとされる<sup>(29)</sup>。武内宿禰を祀っているとする見方がある<sup>(30)</sup>ばかりでなく、かつての宇智郡には武内宿禰の子孫が居住していたとする説もある<sup>(31)</sup>。周知のように、武内宿禰とは長寿で知られ、『日本書紀』によれば、景行・成務・仲哀・神功皇后・応神・仁徳の六朝に仕えた伝承上の忠臣のことだが、宿禰は紀伊国の出身であったとする見方もある。

和歌山市の郊外に鎮座する安原八幡宮の奥宮武内神社（和歌山市相坂）には、現在も宿禰が祀られている。小さな集落の中の狭い境内の一角に、「長寿殿」と呼ばれる木造の小屋が設けられ、そこには宿禰の産湯に使ったとされる古井戸がある。境内の説明版によれば、これを宿禰の産湯の井戸と認定したのは第71代の国造紀俊範であって、享保十六年（1731）のことに過ぎないと言う。ところが、十九世紀になると、『紀伊続風土記』や『紀伊名所図会』などにも宿禰の産湯の井戸のことが取り上げられ、宿禰が紀伊国の生まれであるということは、確かな事実であるかようになって行く。

とは言え、『古事記』（孝元天皇段）には、宿禰の母は代々日前神宮の神官を務めて来た紀国造の血筋の山下影日売であったとされている。同様に、『日本書紀』の景行天皇三年二月の条にも「紀直が遠祖菟道彦が女影媛を娶りて、武内宿禰を生ましむ」と見える。紀氏は、紀ノ川流域を勢力範囲としていたと考えられ<sup>(32)</sup>、宇智神社も南海道に沿った紀ノ川の河川敷近くに鎮座している。宿禰の子孫には、巨勢氏、葛城氏など、紀伊国への交通路を拠点としていた氏族も見られる。そうしたことが、宿禰は母の里紀伊国で生まれたとする理解を生んだのであろう。

宇智野の歌の反歌（巻一・4）には「たまきはる宇智」という《古事》が使用されている。それは、ウチに関わる何らかの古事（由緒・来歴）の存在を前提とした表現であったと考えられる<sup>(33)</sup>。『古事記』にも、

たまきはる 内の朝臣 汝こそは 世の長人 そらみつ 大和の国に 雁卵産と聞くや

（記71）

という同じ表現を持つ歌謡が見られる。ほぼ同じ歌謡は『日本書紀』（仁徳天皇五十年春三月の条）にも見られるが、この「内の朝臣」とは武内宿禰（『記』では「建内」）のことである。宿禰に縁のある宇智野の歌に使用された「たまきはるウチ」という《古事》の背後には、宿禰に関する古事の存在を想定することができよう。言うまでもなく、それは長寿に関わる古事であった可能性が高い。

「たまきはる」の語義は不明だが、平城京の時代の万葉の世界では、「命」を導き出す例が一般的である。しかし、元来それは、地名や人名を導き出す古層の枕詞<sup>(34)</sup>であったと考えられる。したがって、「世の長人」である「内の朝臣」を称える働きを持っていた、と考えて間違いあるまい。「タマは 靈魂。キハルはすり減る、尽きるの意」<sup>(35)</sup>とする説、「魂のながらえている限り」という意味であっ

たとする説<sup>(36)</sup>などがあるが、いずれにせよ、宇智野の歌で「たまきはる宇智」とうたわれた時、長寿のシンボリックな存在であった武内宿禰がイメージされた可能性は高いと見てよいだろう。

すでに述べたように、阿騎野では水銀が産出されたが、吉野川（紀ノ川）沿いの宇智郡（現五條市）にも、水銀鉱床と関わり深い「丹生」という地名が分布している。たとえば紀ノ川の支流の丹生川であり、式内社の丹生川神社（五條市丹原町）である。宇智野も長寿に関わり、生命力の強化と再生を促すことが期待された場所であったと見做すことができる。長寿のシンボルとしての武内宿禰と、その子孫とされる内臣の居住地が紀ノ川流域に広がるのも、一つには水銀鉱床の分布と関係があるのではないか。

『続日本紀』には、文武二年（698）二月、慶雲二年（705）二月、慶雲三年二月に、宇智郡に行幸したという記事が見える。いずれも藤原京の時代のことであって、平城京に遷都された後には見えない。盆地の南部に都が置かれた時代にはとりわけ、宇智野は身近な存在であったということになろう。言われるように、天皇家の狩場であったと考えてよいのかも知れない。

天平三年（731）の跋を持つ『住吉大社神代記』には、紀伊国伊都郡にも住吉神社の置かれていたことが見える。伊都郡高野口町名古曾に鎮座する住吉神社であろうが、それは紀ノ川の北岸を平行して走る南海道の道沿いに鎮座している。とは言え、『延喜式』の神名帳にはその名が見えない。平城京の時代にはその役割が低下していた可能性が高いと見るべきだが、伊都郡の住吉神社の存在は、盆地の南部に都を置いた7世紀において、海外への玄関口として、紀伊国が重要な拠点だったということを示すものであろう。

## 7 中央構造線

伊勢と阿騎野は、明日香のほぼ真東にあたるが、紀伊と宇智野は必ずしも、明日香の真西ではない。紀伊方面の道は「南海道」と呼ばれていたことから窺えるように、やや南に傾いている。にも拘わらず、伊勢・阿騎野と紀伊・宇智野という対であるのは、そうでなければならない理由があったからではないか。

実は、それらの土地はいずれも、ほぼ中央構造線上に位置している。この大断層は、現在の伊勢市から櫛田川を溯り、高見峠を通過して、紀ノ川を和歌山市へと向かって東西に走っているが、この上には広く水銀鉱床の分布することが知られている<sup>(37)</sup>。すでに述べたように、水銀は不老長生に効果があるとされるのだが、その鉱床は皇太神宮と日前神宮とを結ぶ中央構造線に沿って分布しているのだ。「原万葉」には伊勢と紀伊に関わる歌が多いと述べたが、阿騎野、宇智野、吉野などに関わる歌々をも含めれば、「大和国中」と呼ばれる盆地の外の地に関わる歌は、中央構造線に沿った地域におけるものが大半であると言ってもよい。

東西をタテとする観念は、言うまでもなく、太陽の運行方位を前提として形成されたのであろう。しかし、「原万葉」において東西の方位、すなわち伊勢・阿騎野と紀伊・宇智野が強く意識されているのは、東西に広がる日本列島の形とともに、中央構造線の存在があったのではないか。武内宿禰の伝承は決して古いものではなく、7世紀に形成されたのだとする説<sup>(38)</sup>も有力だが、水銀の効用が注目されるようになったのも、おそらく同じ時期であろう。『続日本紀』文武二年（698）九月の条には、各国から顔料が献上されたとする記事が見えるが、伊勢国からは「朱沙」、すなわち水銀が献上されている。

周知のように、正倉院にはさまざまな薬物が保存されているが、古代日本の貴族社会においては、長生を得るための薬物に対する関心が深かったという指摘がある<sup>(39)</sup>。度重なる持続の吉野行幸を、

水銀との関係で説明しようとする説も有力である<sup>(40)</sup>。確かに、孫の成長を待たねばならなかった持統は、自身の長寿こそが最大の課題であったと考えられる。したがって、そうした持統を典型として、長生を可能にする土地に赴くことは、古代の王権にとって必要な政治的課題ですらあったのだと考えることができよう。

盆地の北側に位置する平城京の時代になると、当然のことだが、地理的な条件が違って来る。たとえば、藤原京の時代、大宝二年（702）に渡唐した山上憶良は、帰り着く港として「大伴の御津」（巻一・63）——堺市甲斐町東に鎮座する開口神社の一带と見られる<sup>(41)</sup>——をうたっているが、天平五年（733）の遣唐使に関わる笠金村の歌（巻八・1453）には、難波津から出航したことがうたわれている。平城京から西に行く場合は、三条大路の延長線上にあたる暗峠、すなわち「直越えの道」（巻六・977）を越えて難波津へというルートが中心になっているのだ。

しかし、すでに述べたように、聖武天皇の行幸には、西に向かって世界に君臨する天皇という意識が明確に見られる。中央構造線の存在によっても意識化された東西方向を優位軸とする世界観が、依然として引き継がれているのであろう。「平城万葉」が形成される基盤の一つとして、そうした面を指摘することができる。

## 8 「万葉集」巻一の視野

藤原京への遷都直前の歌（巻一・45～49）で終わるとされる「原万葉」に対して、その増補部は藤原京への遷都に関わる歌（巻一・50）から始まり、平城京に遷都した後の歌（巻一・81～83）で終わっている<sup>(42)</sup>。また、藤原京に遷都した直後の「御井」の歌（巻一・52～53）で終わる前半部に対して、それは平城京遷都直後の「御井」の歌（巻一・81～83）で終わるとする説もある<sup>(43)</sup>。いずれにせよ、それらは概ね、南面する天子の都であった藤原京の時代がヤマトウタの歴史の大きな節目だと考えられていたことに基づく、と見ることができる。

「原万葉」と呼ばれる部分は、雄略御製（巻一・1）から始まり、香具山で国見をする舒明御製（巻一・2）が続いている。盆地の東側から、西向きに国見をしていることになる。以後は、地方での歌が多数を占めているが、冒頭の二つの御製と節目となる藤原京への遷都に関わる歌々を別とすれば、宇智野の歌に始まり、阿騎野の歌で終わる、といった形になっている。大和の西と東の境界の野である。狩は野で行なうものだが、それは神と人との境界であったとする見方もある<sup>(44)</sup>。『万葉集』巻一には、大和の王権の側にあったと見られる編者の視野が、こうした形で反映されていると見てよい。

一方、増補部に収録されている歌々は、紀伊国（巻一・54～56）、三河国（巻一・57～61）、難波宮（巻一・64～69、71～73）、吉野宮（巻一・70、74～75）など、行幸先で詠まれたものが中心である。39首中の20首、すなわち過半数を占めている。それらの土地が、藤原京の時代の王権にとって重要な拠点だったということであろうが、それは8世紀の大半をかけて形成されたと見られる『万葉集』の各編纂段階においても追認され得るものだった、ということであろう。

紀伊、伊勢などと同様に、三河にも中央構造線が走っている。伊勢湾を渡り、渥美半島を縦断し、豊川市を通って、伊那谷を諏訪に向かって北上しているのだ。また、前半部には見られなかった難波宮行幸の歌の多さ（9首）も目を引くが、「在大唐」とする歌（巻一・63）をも含め、その視線は全体に西を向いていると見做すことができる。その点では巻一後半部も、「原万葉」の視野と基本的に同じであると考えてよい。



## 9 結

『万葉集』はどのような歴史認識に基づいて編纂されているのか、といった問題の立て方によって、一首一首の万葉歌を読み解いて行く必要がある<sup>(45)</sup>。一方、『万葉集』はどのような宇宙観に基づいて形成されたのか、といった空間認識の問題をも考えてみなければならない。そうした場合、式内社を中心とした各地の神社に注目してみることによって、『万葉集』を別の面から捉え直すことが可能である。とりわけ、歌々に詠まれた地名を考える場合、それが一つの有効な方法となる<sup>(46)</sup>。神社の位置とその祭神、及び祭祀の構造などを確認することによって、その土地と王権との関係が見えて来るからである。

現在、多くの日本人が畳と椅子を併用する生活をしているように、古代においても、固有の文化と外来の制度等は、決して矛盾する関係にあったわけではあるまい。『万葉集』の比較文学的な研究はとても大きな成果を上げており、もちろん重要である。とは言え、平城京の基本は中国を範とする律令制だが、その職員令において、太政官に優先するのは神祇官である。当然のことながら、その一方で、日本の神々に対する検討も必要だということである。

最後に、『万葉集』研究の方法の一つとして、そこに詠まれた地名と式内社を中心とした神々との関係を検証することの必要性を、ここで改めて確認しておきたいと思う。

### 【注】

- 1 千田稔「横大路の歴史地理」（上田正昭編『探訪 古代の道 第一巻 南都をめぐるみち』法蔵館・1988）。
- 2 「鳥庄遺跡」（明日香村教育委員会・2004）、「飛鳥京跡第151次調査——内郭中枢の調査——」（奈良県立橿原考古学研究所・2004）など。
- 3 拙稿「東アジアの中の玉津嶋——神亀元年の紀伊国行幸について——」（『万葉史の論 山部赤人』翰林書房・1997）、同「『野嶋の海人』と『あはび珠』——再び難波宮従駕歌の論——」（同）など。
- 4 拙稿「東アジアの中の玉津嶋——神亀元年の紀伊国行幸について——」（先掲）。
- 5 日下雅義「紀伊水門と和歌浦」（『古代景観の復原』中央公論社・1991）。
- 6 吉田東伍『増補大日本地名辞書 第三巻』（富山房・1901）。
- 7 千田稔「五泊の位置」（『埋れた港』学生社・1974）。
- 8 吉川正倫「大坂山口神社」（式内社研究会編『式内社調査報告 第三巻 京・畿内』皇學館大學出版部・1982）。
- 9 注1に同じ。
- 10 赤と黒を一对にした事例は、『日本書紀』にはこの一例だけである。ただし、垂仁天皇二年の条に、任那の使者の帰国に際して、任那王への「賜物」として「赤絹」を持たせたという事例が見える。同条の「一云」に、都怒我阿羅斯等に「赤織の絹」を授けたとする伝えもある。また、『続日本紀』天平十三年（741）十一月の条に、「始めて赤幡を大藏・内藏・大膳・大炊・造酒・主醬等の司に班ち給ひ、供御の物の前に建てて標とす」とする記事もある。いずれも赤が天皇の印であると言ってよい。
- 11 伊藤博「東歌——卷十四の論——」（『萬葉集の構造と成立 上』塙書房・1974）。
- 12 そうした事例については、拙稿「古代日本におけるグローバル化の問題——大伴坂上郎女と平城京——」（『日本大学精神文化研究所紀要』37集・2007）でも論じた。
- 13 海野一隆「日本図」（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第十一巻』吉川弘文館・1990）。
- 14 注13に同じ。
- 15 たとえば、福永光司「天皇と道教」（『道教と古代日本』人文書院・1987）など。
- 16 中西進「原万葉——巻一の追補——」（『美夫君志』7号・1964）。
- 17 拙稿「『初期万葉』の世界——その歴史認識を考える——」（高岡市万葉歴史館編『額田王〔高岡市万葉歴史館叢書18〕』高岡市万葉歴史館・2006）。
- 18 その点に関しては、拙稿「万葉集と新羅——遣新羅使人等なぜ新羅をうたわなかったか——」（『史聚』40集・2007）を用意している。

- 19 丹生廣良・岩田千春・名草杜夫「日前神社・国懸神社」(式内社研究会編『式内社調査報告 第二十三卷 南  
海道』皇學館大學出版部・1987)。延享三年(1746)、杉原泰茂によって記された『南紀神社録』(神道大  
系編纂会編『神道大系 神社編四十一 紀伊・淡路国』神道大系編纂会・1987)による記述であろう。
- 20 『日本書紀』神代上・第七段一書の第一には、「石凝姥を以ちて冶工とし、天香山の金を採りて日矛に作る。  
又真名鹿の皮を全剥にして、天羽籬に作る。此を用ちて造り奉る神は、是即ち紀伊国に坐します日前神なり」と  
見える。
- 21 中山正実『壁画「阿騎野の朝」』(大宇陀町教育委員会・1940)。
- 22 内田正男編『日本暦日原典』(雄山閣・1975)。
- 23 二句目の「炎」を、ほとんどの写本がケブリと訓んでいる。『萬葉集燈』などは、それを炊煙としていたが、  
現代でもこれをケブリと訓む説がある。たとえば、佐佐木隆『『万葉集』四八番歌の〈東野炎立所見而〉』(『学  
習院大学文学部研究年報』37号・1990)である。
- 24 小田基彦「阿紀神社」(式内社研究会編『式内社調査報告 第三卷 京・畿内』皇學館大學出版部・1982)。
- 25 拙稿「阿騎野について——中ノ庄遺跡の発見に寄せて——」(『語文』95輯・1996)。
- 26 和田萃「丹生水銀をめぐる——佐奈県の手力男命——」(『日本古代の儀礼と祭祀・信仰 下』塙書房・  
1995)。
- 27 上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂・1967)。
- 28 『奈良県の地名〈日本歴史地名大系29〉』(平凡社・1981)。
- 29 木村芳一「宇智神社」(『式内社調査報告 第三卷 京・畿内』皇學館大學出版部・1982)。
- 30 伴信友『神名帳考証』。国書刊行会編『伴信友全集 第一卷』(ぺりかん社・1977)による。
- 31 宮坂敏和「宇智神社」(谷川健一編『日本の神々 神社と聖地 4大和』白水社・1984)。
- 32 岸俊男「紀氏に関する一試考」(『日本古代政治史研究』塙書房・1966)。
- 33 《古事》の機能については、拙稿「《枕詞》と《冠辞》と——枕詞の生成とその環境 I——」(梶川信行編  
『万葉人の表現とその環境 異文化への眼差し〔日本大学文理学部叢書1〕』富山房・2001)などで論じたが、  
それは古事(由緒・来歴)に支えられつつ地名等を荘厳化する働きを持つ表現であったと考えられる。
- 34 土橋寛「枕詞の源流」(『古代歌謡論』三一書房・1960)。
- 35 注27に同じ。
- 36 土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』(角川書店・1972)。
- 37 松田壽男「古代日本の水銀文化」(『丹生の研究』早稲田大学出版部・1970)。
- 38 津田左右吉「新羅に関する物語」(『日本古典の研究 上』岩波書店・1948)、岸俊男「たまきはる内の朝  
臣」(『日本古代政治史研究』塙書房・1966)など。
- 39 増尾伸一郎「〈長生久視〉の方法とその系譜」(『万葉歌人と中国思想』吉川弘文館・1997)。
- 40 和田萃「持統女帝の吉野行幸」(『日本古代の儀礼と祭祀・信仰 下』塙書房・1995)。
- 41 千田稔「古代畿内の水運と港津」(上田正昭編『探訪 古代の道 第二卷 都からのみち』法蔵館・1988)。
- 42 注16に同じ。
- 43 伊藤博「卷一雄略御製の場合」(『萬葉集の構造と成立 上』塙書房・1974)。
- 44 古橋信孝「村の外の世界」(古橋信孝編『ことばの古代生活誌』河出書房新社・1989)など。
- 45 拙稿「《初期万葉》の『挽歌』」(『語文』115~116輯・2003)、同「《初期万葉》の『相聞』」(『日本大学  
文理学部人文科学研究紀要』67号・2004)、同「《初期万葉》の世界——その歴史認識を考える——」(先  
掲)など。
- 46 式内社に注目することによって、万葉歌の読みを明らかにしようとした論文としては、拙稿「武庫の浦の入江——  
遣新羅使歌群の冒頭歌をめぐる——」(『上代文学』53号・1984)、同「港と神々——式内社から探る万葉  
の世界——」(梶川信行編『万葉人の表現とその環境 異文化への眼差し〔日本大学文理学部叢書1〕』富山房・  
2001)などがある。